



→この時期、いつも  
渡し舟には傘の花  
が咲くが、今年はな  
ぜか、じみな色だっ  
た。たまたまなのか  
もしれないが……。



↑昨年はいっせいに咲いたタカサゴユリが、今年は一輪も咲かなかった。草刈り作業員には、花もただの草でしかなかったのだろうか。

「玉砕って言葉、大本営が造り出したんだってエ」

いきなり満夫さんがいった。

満夫さんは先代舟頭の二番目の弟。

上のふたりの兄たちは、ともに戦争に行った。幼かった満夫さんは、そんな兄たちのように、早くなりたかった。

毎年、八月十五日になると、兵隊になりたいと思っていた子どもどものころのことを思い出して、不思議に思う。

玉砕とは、玉が美しく砕けるように名誉や忠義を重んじて、いさぎよく死ぬこと、と広辞苑に書かれている。

死が名誉なことである、立派なことであると信じ込ませるために考えだされた言葉だ。

満夫さんによると、戦争で戦って死ねば魂は神となって靖国神社に帰ることができると、そう教えられて大きくなってきたという。

「爆弾を抱えて戦車の下に飛び込んで相手をやっつける。片道だけの燃料を積んで敵艦に突っ込む。いってみればいまイスラム教徒がさかんにやっている自爆攻撃だ。聖戦ともいう。」

## 今週のクマ

気のせいだろうか。クマの表情にもすこしゆとりがでてきたように見える。気温はあいかかわらず35℃を超えているが、吹く風に秋の気配を感じているのではないだろうか。



↑今年の夏も、ほぼおなじ場所にコガネグモはお尻を上、頭を下にして獲物を待ちかまえていた。

そんなニュースを見て、いまの日本人はイスラム教徒はひどいやつだといっているが、そんなことは日本人がとつくにやっていたことだ」

よく人のことをいえたもんだと思うよと満夫さんはいった。

「戦争反対！　　いっなのはかんたんだよ。そういったほうが支持されるしな」

長い前置きがようやく終わった。

「原爆を落とした飛行機の機長の息子がいったそうだな。原爆投下は正しかったと。そのおかげで戦争がはやく終わったんだって」

反論を承知で満夫さんは、あんたにだからいうけど、全滅することを玉砕などという美しい言葉にすりかえるお偉方の子孫だもの、口が裂けても機長の息子の発言をそういう見方もあるとはいえないよな。おかげで全滅を避けられたとも。

アメリカは東京を焼夷弾で焼きつくそうとしたが、爆撃目標としてはかっこうのはずの中心部は避けて焼夷弾を落としたり。いわば警告だったはずなのに、負けを認めなくなかった大本営はひどいよなと満夫さんは、憤懣やるかたない。

これからは毎年八月十五日には血圧降下剤を飲む。俺も年だからと笑った。